

研究班番号【 82 】

現代版大坂の陣～地勢の変遷から考える～

社会班: 紀平大輔、國川太郎、松山昂志郎

Abstract

The purpose of this study is to reveal the impact on tactics that are caused by geographical advantages that have changed over time. This study reports that to compare old maps around Osaka castle and current maps around there. We use Google Earth as a current map. We consider tactical changes from the difference between the two maps. The experiment shows that increasing building height and decreasing large lots eliminates geographical advantages. This study concludes that tactics that advantage of geographical advantages are eliminated.

要約

本研究の目標は、時代の変化に伴う地勢の変化を再確認し、新たな戦略の提案につなげる事である。具体的には、大坂夏の陣当時の大坂城周辺の地勢と現代の大坂城周辺の地勢の変化を比較し、地の利が変わることによって戦術や勝敗がどのように変化するかを調査する。現在の大坂と戦国時代の大坂との違いとしては、河川の付け替えや地面のアスファルト化などが挙げられる。戦国時代では丘が重要視され、河川や湿地で守られた丘の城は急な崖を利用して一方を防御することができた。

1. はじめに

楠木正成が1333年の元弘の乱で地の利を活かした戦術で勝利を収めたことから、地勢の変化が戦術に影響を与える可能性があるのではないかという疑問を持った。大阪において戦国時代と現代の地勢の変化を比較し、戦略的な影響を考察する研究を行った。1615年の大坂夏の陣や天王寺・岡山の戦いを基に、武器は当時のものとして、地勢や土地利用の変化を調査し、時代の変化に伴う戦略の変化を考察した。

2. 研究手法

大坂夏の陣、天王寺・岡山の戦い当時の大坂城本丸及び天王寺周辺と、現代の大坂城と大阪城から天王寺区にかけての地勢の変化を見比べる。本研究では当時の古地図とGoogle Earthを用いて比較した。また、戦国時代に主流であった戦術を参考文献を通して調査し、時代の流れによる地勢の変化がもたらす戦場の変化が、戦術や布陣にどのような影響を及ぼすかを2つの調査から検討した。

《調査1》

①大坂夏の陣における豊臣方・徳川方両軍の布陣と、1600年代前半頃の大坂城周辺の古地図を調査する。

②google earthを通して調査した現在の大坂城周辺と、①で調査した布陣、古地図を照らし合わせる。

《調査2》

①参考文献を通して、戦国時代に有効であり、かつ現在にも応用できるような戦術や戦法について調査する。

3. 結果

<調査1>

現代の大坂と400年前の大坂を比較すると、大阪城の北側にある淀川などの河川が付け替えられたことや、コンクリートの建造物が立ち並ぶようになったこと、京橋や追手門辺りに高層ビルが建っていること、地面が砂地からアスファルトに変わったことが挙げられる。このような変化は都市の近代化によるも

ので、交通や建築技術の進歩によって実現された。そのため、布陣を敷けるようなある程度のスペースを擁する土地が、そういう都市の近代化で、減少した。一方で、天王寺区の真言坂や四天王寺などの寺社仏閣はほとんど残っていることが指摘される。これらの史跡や歴史的建造物は、大阪の歴史や文化を伝える重要な要素として現代に残っている。

<調査2>

戦国時代における丘の重要性は特筆すべきものであり、河川や湿地で守られた丘の城は、河岸段丘などの急崖を利用して防御することができた。丘の城の敷地に平地があれば、大軍の集結や物資の集積にも便利であり、出撃の際も迅速に行動できた。このような地の利を活かした戦略は、戦国時代の戦いで重要な役割を果たした。丘の地形が戦略的な要素として活用される一方で、都市の近代化に伴う変化では、土地利用や建築技術の進歩が主要な要因となっている。

4. 考察

現代の大坂と約400年前の大坂を比較すると、淀川に架かる橋の幅が4車線に広がるなど、地勢やインフラの設備は大きく異なる。当時の大坂では、地の利が戦略的な要素として非常に重要視されており、橋や水路の整備が戦争の結果に直接影響を与える一因であった。そのため、当時の戦略的な要所としての地位を確保するために、橋や水路の整備が積極的に行われた。この地の利を活かした戦略は、戦国時代の大坂の勢力争いにおいて大きな役割を果たした。一方、現代の大坂では、交通インフラが発展し、様々な手段で地の利を補うことが可能になっている。道路のネットワークは、淀川などの河川の存在といった地形の制約を軽減する役割を果たしている。このような変化により、戦略的な要素としての地の利の重要性は相対的に低下し、戦略の展開において他の要素がより重要になっていいると考えた。そのため、この考察での重要な要素として、経済力や技術力などといった要素が台頭しており、地形の優位性だけではなく、より多角的な戦略が求められるようになっていると考察した。一方で、自然を残す地方では、同じような都市の整備や発展が行われない場合がある。自然を活かす観光地やリゾート地などでは、都市の整備や発展が控えめになり、地の利が存続する可能性が高まる。したがって、都市と地方では地の利の影響は異なる結果を得ることができると考えられる。

5. まとめ

大阪のような起伏や河川が多く存在する都市でも、時代が進むにつれて都市の整備や発展が著しく進んでいる。戦国時代のような地の利が都市において同じように重要であるとは言いがたく、現代の大坂では交通インフラや都市計画が進み、自然地形の影響をある程度補うことが可能になっている。また、高層建築の普及といった都市の発展に合わせた新たな都市計画が進行しているため、戦術を練るにあたって重要な要素となる布陣を敷けるような広大な土地が限られていく。このような結果も、地の利を活かせなくなった要因である。しかし、これは大阪という都市部に焦点を当てているため、地方では異なる結果が得られるだろう。本研究は、大阪を対象としていたので、都市部の変化のみを扱っていたため、今後は、地方ではどのような結果が得られるのかを探っていきたい。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

橋場日月著(2015)『地形で読み解く「真田三代」最強の秘密』朝日新聞出版

谷口研語著(2014)『「地形」で読み解く日本の合戦』株式会社PHP研究所出版

三井住友トラスト不動産:築き上げられた大阪の基盤～難波 | このまちアーカイブス
<https://smtrc.jp/town-archives/city/namba/index.html>